

## 序 誰が囚とらわれているのか？

マクシム・ゴーリキーにこんな小説がある。

あるところに地下室で毎日パンづくりにいそしむ二六人の男たちがいた。これといった愉たのしみもなく、課された仕事を憎みながらも、ただ黙々と働いて日々が過ぎていく。そんな労苦のなかで一服の清涼剤だったのが、上の階で小間使いとして働く一六歳のターニヤという少女の訪問。パンをもらいにくる彼女の太陽のような笑顔に癒なぐさやされる男たちは、全員でターニヤへのプラトニックな愛を誓う。そんなおり、元兵士の優男やさおとこが仕事仲間の新顔として彼らの前に現れる。女にモテることを鼻にかけた元兵士の態度に反発を覚えた二六人は、その場の勢いで、そんなにいうならターニヤを口説き落としてみよ、という賭けを提案してしまう。そして二週間後の雨の日、元兵士とターニヤの穴倉での密会を目撃してしまった男たちは、上気した表情で穴倉から出てきたターニヤを囲い込み、罵詈雑言ばりざげんを浴びせかける。はじめは怯おびえて声も出せなかったターニヤは、誰かに上衣うわぎの袖をつかまされたのをきっかけに、「あーあ、あんたたちはみんな気の毒に、牢屋ろうやへ入っているような

もんね！ Oh, you miserable prisoners!』と言い放って、振り返りもせず颯爽と消えていく。もう二度と彼らの前に現れることはなかった。

『二十六人の男と一人の少女』のあらすじである。

\*

この短篇たんべんは一八九九年に発表された。飢えと貧困に苦しみながらも大学に入るという目的のもとカザン市を訪れ、そのビスケット製造所で働いた経験が反映されていたといわれている。ゴリキー一六歳の頃のことである。なお、本作はスターリンが愛した一作としても名高い。

この小説を読んでいると、特に一部の男性は自分のなかの痛いところを衝かれたような感覚に襲われるかもしれない。はたまた自分自身がかつてしてかした「やらかし」を思い出して悶絶もんぜつするようないたたまれなさを抱くかもしれない。

ただし、ことは容易に連想可能な、恋愛禁止の掟おきてを破ったアイドル（＝偶像）に対して剥き出しの攻撃心を露あらわにするそのファンたちに限定されない。

どんな分野であれ、同好の士がちょっとでも集まればいさかいの着火剤はそれだけでもう十分だ。どれくらい知識があるか、どれほどのカネをかけたか、といった自慢合戦のなかで、誇りや劣等感を抱いたり、或いは意地を張って自分を大きく見せねばならぬと感じるとき、しばしばマウンティングとも呼称される、コップのなかの小さな序列争いに誰しもが知らず知らずのうちに投げ込まれている。

マウンティングとは、もともとは動物行動学の用語で、哺乳類が同族の個体に馬乗りすることで優位を示す行動を指していた。特に性行動において顕著にみられる。動物の群れから人間の社会へ進歩したかと思えば、社会のなかでさえ動物的なならいが文化の意匠を借りて復活してしまう。

だからこそ『二十六人の男と一人の少女』には、より普遍的で根源的な、集団性のもついやらしさが集約されているように感じられるのだ。一人ひとりとは心優しく親切だったとしても、集団のなかで振舞うとき、変な戦いに巻き込まれて自分が変になってしまうことがある。変に感染してしまうことがある。「気の毒」という日本語特有の語感を拝借して言えば、確かにここにはあらゆる集団がもちうる毒のようなものがある。

\*

ターニャは自らを取り囲む男たちを「囚人 prisoners」のようだ、と形容した。この言葉は、極めて皮肉に富んでいる。客観的にみれば男たちに囲まれたターニャの状況こそが「囚人」的である——そしてその牢は彼女の自由を奪う実効力をまるでもたない——ことだけに留<sup>とど</sup>まらない。というのも、男たちがターニャに好意を寄せるきっかけとなったのは、玄関の窓ガラスから日々発される「囚人さん Little prisoners」という美しい呼び声であり、同じ少女の同じ言葉がまったく反対の効果のなかで用いられるからだ。

冒頭の好意的な「囚人さん」の呼び声が比喻しているのは、パンづくりのため昼間からこもらねばならない暗い地下室で働く労働者のことを指している。対して、第二の「囚人」が発されるのは、ちょうど昼時、男たちが地下室の外に出てターニャの浮気(!?)現場を取り押さえたときのことだった。ごく普通の意味で、彼らはもはや「囚人」ではない。地下室の外にいるのだから。にも拘<sup>かか</sup>らず、この短篇を読む者はターニャの捨て<sup>す</sup>台詞<sup>ぜりふ</sup>に従って彼らが相変わらぬ「囚人」であることを深く納得するに違いない。

囚われたものが他者を捕えようとする。いや、他者を捕えようとする意欲そのものなかに厄介な囚われが棲みついている。

それにしても、彼らは一体なにに囚われているのだろうか。現代のフェミニストならば、単刀直入にホモソーシヤリティという有名な専門用語でそれを呼ぶかもしれない。特に男性同士の絆を確認するための同調的で排他的なノリを指すための言葉だ。なるほど、その言葉遣いはそれなりに説得的であるし、実際本書でもいくぶんかページを割くべき重要アイデアであることは疑われない。

ただ、本書では、いったんその語を宙づりにして、その囚われの原因を「有害な小集団」と仮称するところから出発してみたい。「有害な小集団」は、性差に限定されない人々のあいだにある種々のミクロな違い、その隙間に巣くうコミュニティ／コミュニケーションにおいて我々を日々毒している、変の発生原因だ。

また「有害な小集団」は、二〇世紀以降の組織論、すなわち工場や軍隊など巨大化していく組織体をどうマネジメントしていくかという視角とも異なる厄介をもっている。マックス・ウェーバーは近代組織の特徴を官僚制に求め、従うべきルールの一般化、権限の明確な階層性、個々人を役職に徹して扱う没人格性などをそのマイナス効果もふくめて考察

したが、ここで注目したいのは、もっと小規模なもの、すべてのメンバーがすべてのメンバーを知っており、親密で互いに気心の知れたつどいが、親しくてよく通じ合っているがためにかえって抱え込んでしまう毒性である。

歴史上、数多くの小集団の呼び名があった。一二世紀のフランスにおいては、暇をもてあます宮廷女性によって自宅を客人たちに開放するサロン文化が育っていった。一七世紀中葉のイギリスはロンドンでは、コーヒーハウスの流行のなかで有益な情報を求めて中流・上流階級の人々が互いに雑談する習慣を経て、これがクラブの文化へと発展していく。中世の日本文学史には、共同制作で歌をつくるためにつどった連や座と呼ばれる集まりがあった。

このなかで本書が厚く取り扱いたいのは、建前上は階級の偏重を解消し、平等で開かれた集団性を目指していたはずの、「サークル」に関するあれやこれやの語られ方である。もとはロシアに由来する、その反権威主義的な小集団を改めて考えることで、開かれのなかの閉ざされ、閉ざされのなかの開かれという逆説をより原理的に問うことが期待できるように思うからだ。

\*

現代は毒の時代である。だとするのならば、その毒はいかにして解除できるのだろうか。本書が目指したいのは、集団性の解毒法デトックスである。具体的にその任務は、第一に単なる害悪に限定されない修辭「毒」のもついやらしい効果を確認した上で、つづいて戦後を代表する哲学者の一人、鶴見俊輔を中心にしたサークルの思想をたどり直すことによって果たされることになるだろう。

アリストテレスの名とともに、人は社会的動物であるとしばしばいわれる。その心は、人間は独りでは生きられず複数の他者との共同／協働によって社会生活を送ることにある。ならば、人間が人間であることの条件のなかに、或いは既に毒が仕込まれているのかもしれない。毒は不可避で、しかも克服不能なのだとしたら、あとに待っているのは絶望だけに違いない。

が、それでも現在流通している薬剤の多くが正しい用法を守った毒物でもあることを想起するとき、その望みなしの急転直下をもう少しマイルドに、傾斜が緩やかなすべり台く

らしい冗長性のなかで集団との付き合い方を冷静に考えることくらいはできる。毒とは用法を間違えた薬である、毒が問題なのではなく使い方が問題なのだ、と発想を変えてみれば、できることの数を増やすことはできる。

フランスの哲学者、ジャック・デリダは、「プラトンのパルマケイアー」という小難しい論文のなかで、パルマコンというギリシャ語が毒を表すと同時に薬をも意味するという両義性に注目し、書き言葉が物忘れの元凶でありながら、その場で消えてしまう話し言葉を後の世に残しておくる思考のパルマコンだと論じた。

社交家であれ人間嫌いであれ、人間ならばあまねく勧められる指針は、いつの世も、きみたちはよくも悪くもインスタント（瞬間的）な存在ではない、時間のなかで生きる存在者である、ということに尽きるだろう。薬が毒に墮おちないよう使うにはそれなりの時間が必要である。性急であってはならない。「有害な小集団」の適切な用法の勘所もつまるところそれであるが、いささか結論を急ぎすぎたかもしれない。もう少しゆっくり進んでいこう。